

お話しを、ゆったりとした口調で語られていた。北条市最後になる秋祭りを、みんなで参加しよう。北条で高縄会をしようと、話は盛り上がった。

二〇〇五年から精養軒に変更したのは、韻松亭が建て直しで、宴会用の広い部屋がなくなった事が原因だった。この時も二十人余りだったと思うが、壁で仕切られた二部屋に分かれなくてはならなかった。市長や早坂氏は二つの部屋の入り口に当たる廊下に立って二部屋を覗く様な感じで気遣いながら話されていた。

二〇〇七年から早坂氏が会長になられた。大石氏から会長を受けた田中氏が、会長になった年に（二〇〇六年）に急死されたためだった。

新会長の早坂氏は、懇親会の自己紹介を、早坂氏自らマイクを手に一人一人を廻って歩き、出身地や現住所や趣味なども、インタビュー形式で尋ね、面白く引き出してくれた。この年は小学校の同級生二人が参加していて、女性同士の懐かしい話は楽しかった。

二〇〇八年、桜はやや満開を過ぎ、風吹くたびにちらちらと花吹雪が舞う。

参加者は三十四人で、北条からは森社長一人だった。

自己紹介で、故郷にはもう両親はなく、実家さえなくなっているのに淋しいと言った女性がいた。早坂氏は、「この高縄会があなたの故郷ですよ。ここが実家なのですよ」といって励まされた。その方は感動されて、「これから毎年、命のある限り出席したいと思います」と締めくくった。それが会場内の合い言葉になって、次々続く自己紹介の最後に「命のある限り参加します」と言って、温かい笑いとなった。

また早坂氏は、たった一人で、最近上京してきたと言う、何か大きな問題を抱えているような口ぶりの女性には、「困ったことがあったら、独りぼっちだと思わずにここでそうだしなさい」とも言った。それから、愛媛の人は、後輩を引き上げたり助けたりする事が何故か少ない。鹿児島や熊本など九州の人は、そうした連帯が強いのだ。と

懐かしいいろいろな心模様の中で、宴たけなわを一段と盛り上げたのは、早坂氏作詞、石川さゆりが歌う「花へんろ音頭」をテープ音楽に合わせて、早坂氏が歌ってくれたこと。歌詞をコピーして来てくださったから、みんなで合唱になった。最後の歌詞「ここはうれしい鹿島の里に 人も負けずに花となれ あなたはどんな花なのか へんろへんろ花へんろ なもし風早花へんろ」

歌いながら、いったい私はどんな花を咲かせるのだろうかと考えていた。早坂氏のお声は味があつてとても素敵。声は人間性を表すと、優しく穏やかな早坂氏に接してつくづく思ったと書いている。

二〇一〇年は花冷えで開花期間が長かったから、満開の桜を愛でられて最高のはずだったのが、寒い曇天。それでも公園内は勿論のこと、駅のホームから改札までも人で溢れていた。改札を出るために、ロープが張られ、その列に延々と並んでやっと出られるありさまだった。

主席者は四十五人で、初参加者が十三名もいた。知る限り最高参加者だったが、やはり高齢者が多く男性も多い。